

## トラック 2-3

昔々、ムラマロンドという名のジンがいた。彼は牛の脚を食べるのが大好きだったが、それしか食べなかった。彼女の妻は、どんな風に夫が時々牛を殺し、何故、脚以外のところを家に持って帰らないのかと思った。

或る日、牛が殺され、ジンの家に脚が運ばれた。妻は、牛の脚の異常な食べ方にどんな不思議があるのかを見るために、脚の一本を隠した。ジンは家に戻って、妻に脚が届けられたかを尋ねた。

「何本置いていった？」。

妻は答えた。

「3本」。

「なに、3本？ 確かか？ 本当のことを言わないと、お前は困ることになるぞ」。

ジンは死んだふりをした。妻は彼に本当に死んだのかどうか尋ねた。葬式を出すことになるので、妻はもう一度夫に、本当に死んだのかどうか尋ねた。

「そうだよ、私は死んだよ。でも本当のことを言ってくれ。3本しか脚はなかったのか？ 言ってくれ、4本じゃなかったか？」。

「いいえ、3本」。

「それじゃ、埋葬する準備を続けてくれ」。

「あなたを埋葬するんですか？」。

「言ってくれ、4本だったろう？」。

妻は言い張った。

「いいえ、3本でした」。

彼が墓地に運ばれるようとしたとき、[脚の]取次業者が通りかかって言った。

「人生とは不思議なものだ。ほんの数分前に我々是一緒に牛を解体した。彼は私に4本の脚を託し、私はそれを彼の家に持って行ったが、不幸なことに彼はそれを食べる時間もなかったのだろう」。

これを聴いて、ムラマロンドは棺の中で暴れて叫んだ、2回も。

「神よ、私の魂をお救い下さい。私は4本あったと言ったろう」。

妻は言った。

「脚が揃っていなかったら、あなたが本当に[覚悟の上で]死ぬかどうかを、確かめたかったのです」。